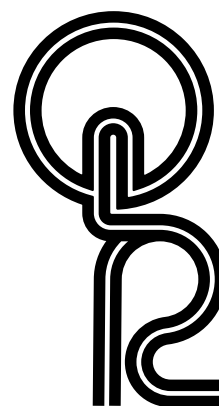


QR Newsletter



第四紀通信

Vol. 13 No.4, 2006



富士山の東麓で発生した小規模なスラッシュなだれ（雪代）の堆積物。舌状の地形の内部に雪塊が隠れている（2006年6月10日日大学生，本田克敏撮影）

Vol. 13 No. 4

July 15, 2006

創立50周年大会案内(第4報)・・・2	50周年記念事業実行委員会報告・・・21
創立50周年記念展示と企画展の案内 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・11	評議員会議事録・・・・・・・・・・21
国際会議等のお知らせ・・・・・・・・13	幹事会議事録・・・・・・・・・・22
倫理憲章策定について・・・・・・・・18	会員消息・・・・・・・・・・23
名誉会員推薦について・・・・・・・・20	募集・・・・・・・・・・24

日本第四紀学会2006年創立50周年大会のお知らせ(第4報)

今年には日本第四紀学会創立50周年にあたり、2006年大会の内容は50周年記念事業実行委員会によって企画・検討されてまいりました。そして首都大学東京をメイン会場とし、50周年にちなんだ4つのシンポジウム(全体のテーマ「人類の環境を第四紀学から考える 過去から見た現在と未来」)が開催されるほか、記念式典、記念パーティー、巡検などが行われることが決まりました。第四紀学会会員以外にも広く参加を呼びかけます。一般研究発表は既にお知らせしたとおり、ポスター発表のみとなります。

1. 日程概略・会場

会場: 首都大学東京南大沢キャンパス(50周年記念パーティー、巡検を除く)

8月4日(金):

午前 評議員会(5号館142号室)

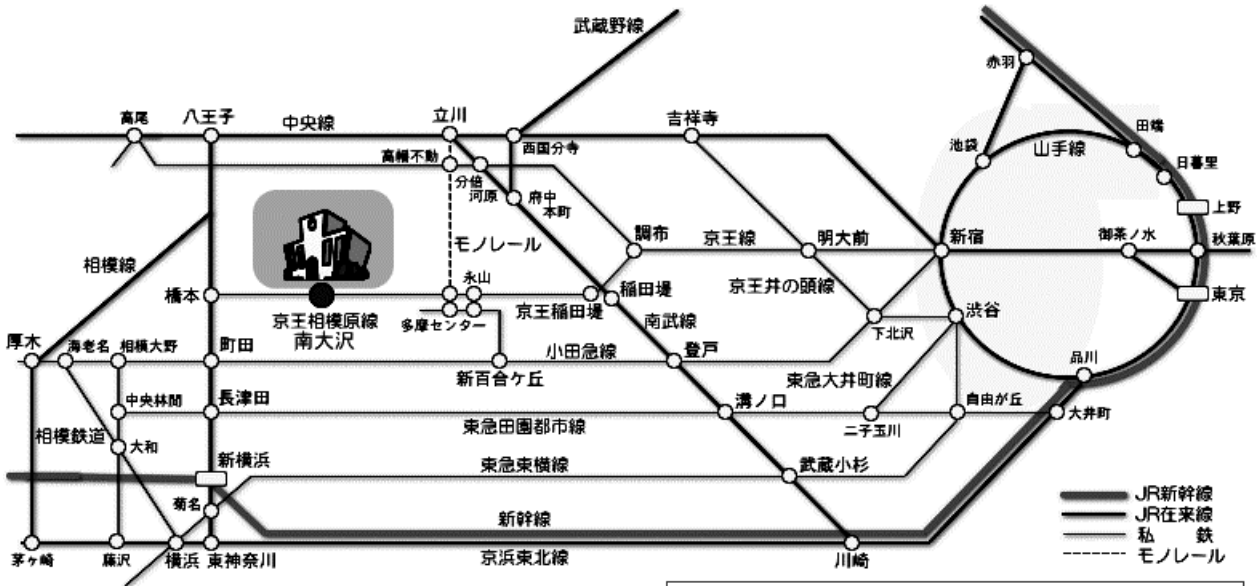
午後 シンポジウム1「最終氷期から完新世への急激な環境変動と人類」(講堂)
一般研究発表【ポスター】(7号館スタジオ)

8月5日(土):

午前 シンポジウム2「鮮新・更新世の日本列島」(講堂)

日本第四紀学会 2006年創立50周年大会日程表			
「人類の環境を第四紀学から考える 過去から見た現在と未来」			
会場: 首都大学東京南大沢キャンパス(八王子市南大沢)			
	第1日 8月4日(金)	第2日 8月5日(土)	第3日 8月6日(日)
午前		9:00~11:30 シンポジウム2 鮮新・更新世の日本列島 (講堂) S2-1~S2-6+総合討論	9:00~12:00 シンポジウム3 過去の間氷期の研究から今後の地球環境の変遷を考える (講堂) S3-1~S3-7+総合討論
	10:30~12:00 評議員会 (5号館142号室)		
午後	昼休み	11:30~13:30 ポスターコアタイム (昼休みを含む) (7号館スタジオ)	12:00~13:30 ポスターコアタイム (昼休みを含む) (7号館スタジオ)
	13:00~13:10 開会挨拶 (講堂)		
	13:10~18:00 シンポジウム1 最終氷期から完新世への急激な環境変動と人類(講堂) S1-1~S1-12+まとめ	13:30~15:00 2006年日本第四紀学会総会(講堂)	13:30~17:00 シンポジウム4 環境問題・自然災害を第四紀学から考える(講堂) S4-1~S4-9+総合討論
		休憩(15分)	
		15:15~17:00 記念式典・会長講演(講堂)	
	移動	17:00~17:10 閉会挨拶(講堂)	
	18:00~20:00 日本第四紀学会創立50周年記念パーティー(京王プラザホテル多摩)		

日本第四紀学会 2006年創立50周年大会(首都大学東京)の会場案内



- 一般研究発表【ポスター】コアタイム (7号館スタジオ)
- 午後 総会, 50周年記念式典(講堂)
- 夕方 50周年記念パーティー(京王プラザホテル多摩)
- 8月6日(日):
- 午前 シンポジウム3「過去の間氷期の研究から今後の地球環境の変遷を考える」(講堂)
- 一般研究発表【ポスター】コアタイム (7号館スタジオ)
- 午後 シンポジウム4「環境問題・自然災害を第四紀学から考える」(講堂)
- 8月7日(月)~8日(火):
- 巡検「南関東の第四紀主要サイトをめぐる」(7日午前9時京王線調布駅北口集合, バスで移動)
- *会場への行き方は上の会場案内を, また各部屋は右の地図をご覧ください。



2. 会場案内

- ・首都大学東京 南大沢キャンパス
- 〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1
- 京王相模原線「南大沢」駅下車, 改札口から徒歩5分. 改札口を出て右手に緑に囲まれたキャンパスが見えます (<http://www.metro-u.ac.jp/access.htm>). 車による会場への来訪はお断りします.
- ・京王プラザホテル多摩 (<http://www.keioplaza.co.jp/tama/index.htm>)
- 京王相模原線, 小田急線, 多摩モノレール「多摩センター」駅下車, 徒歩1分.

3. 一般研究発表(ポスター)の発表要領

- ポスターは大会期間中(8月4日午後~8月6日夕方まで)掲示できます. 会場は7号館スタジオです.
- ポスターセッションコアタイムとして, 8月5日の11時30分から13時30分まで, および8月6日の12時から13時30分までを, 昼休みを含めて説明時間帯に設定しています.
- ボード面積は1題あたり, 縦175cm, 横94cmです(第四紀通信前号でお伝えしたサイズを訂正します). ただし, 左右各5cm程度は金属の枠ですので, この部分は画紙を使用でき

ません。ポスターをとめる画鋏やテープなどは会場で用意します。

ポスターには、発表番号・発表題名・発表者名をポスターのタイトルとして明記してください。発表番号は、本通信のプログラムを参照してください。

ポスター会場でコンピューター・ビデオなどの使用や、画鋏等で掲示できない重量物等の展示を希望される方は、電子メールにて大会実行委員長鈴木毅彦(suzukit@comp.metro-u.ac.jp)まで連絡してください。

4. シンポジウムの口頭発表要領

シンポジウムでは、Microsoft Power Point 2003(及びそれ以下のバージョン)、またはOHPを用いた発表が可能です。また会場にはWINDOWSパソコン1台とMacintoshパソコン1台、それぞれに接続した液晶プロジェクターを用意します。これらの備え付けのパソコンを使用される場合には、データファイルをパソコンにコピーする必要があります。ファイルをUSBメモリーかCDに入れたものを、発表時間よりも前に会場の発表受付ブースまで持ってきてください。別のソフトを利用される場合などには、ご自分のパソコンを持参してください。液晶プロジェクターとOHP1台は同時に使用することができます。

5. 50周年記念式典案内

8月5日の午後には、例年行われている総会に引き続いて、50周年記念式典が行われます。あいさつ、来賓紹介に続いて、名誉会員、第四紀学会創立以来の会員、功労者の表彰などがあり、また会長が50周年記念講演「日本第四紀学会半世紀の歩みと展望 - 特に第四紀編年研究の進歩 -」を行います。夕方には会場を京王プラザホテル多摩に移して、学会創立以来の会員の方や表彰者らを囲んだ記念パーティーが催されます。

6. 参加費・パーティー申し込み等

大会参加費として、会員・非会員を問わず2,000円を申し受けます。当日会場の受付にてお支払い下さい。ただし、70歳以上の会員と学部学生は無料です。

講演要旨集は会場で直接販売いたします(予定価格2,000円)。大会終了後通信販売もいたしますので、購入希望の方は下記へお申しください。

〒162-0041 新宿区早稲田鶴巻町519番地
洛陽ビル3階 日本第四紀学会事務局
E-mail: daiyonki@shunkosha.com
TEL: 03-5291-6231, FAX: 03-5291-2176
50周年記念パーティー(京王プラザホテル

多摩)に参加される方は、人数把握のためあらかじめ予約の申し込みをお願いします。参加費: 一般(予約の場合)8,000円、(当日参加)10,000円、学生(予約・当日とも)6,000円。予約は7月25日までに電子メールまたはFaxで首都大学鈴木毅彦までご連絡下さい(E-mail: suzukit@comp.metro-u.ac.jp, FAX: 042-677-2589)。

7. 巡検案内

巡検「南関東の第四紀主要サイトをめぐる」

2006年8月7日(月)・8日(火) 1泊2日

案内者: 町田 洋・鈴木毅彦・水野清秀・久保純子・松島義章

協力者: 小野 昭・増淵和夫・太田陽子・野口 淳・ほか

参加予定者は既に定員に達しており、申込を締め切りました。参加登録者には、個別に連絡を差し上げます。集合時間厳守でお集まり下さい。

8. 連絡・問い合わせ先

会場

2006年大会実行委員会委員長

鈴木毅彦

〒192-0397 東京都八王子市南大沢1-1

首都大学東京 都市環境学部地理環境コース

E-mail: suzukit@comp.metro-u.ac.jp

TEL: 042-677-2590 FAX: 042-677-2589

記念式典・50周年記念事業全般

日本第四紀学会50周年記念事業実行委員会

事務局長 山崎晴雄

〒192-0397 東京都八王子市南大沢1-1

首都大学東京 都市環境学部地理学教室

E-mail: yamazaki@comp.metro-u.ac.jp

TEL: 042-677-2592 FAX: 042-677-2589

一般研究発表(ポスター)・シンポジウム発表

日本第四紀学会行事担当幹事 遠藤邦彦

〒156-8550

東京都世田谷区桜上水3-25-40

日本大学文理学部地球システム科学科

E-mail: endo@chs.nihon-u.ac.jp

TEL & FAX: 03-3290-5451

巡検

水野清秀

〒305-8567 茨城県つくば市東1-1-1中央

第7 産業技術総合研究所地質情報研究部門

E-mail: k4-mizuno@aist.go.jp

TEL: 029-861-3681 FAX: 029-861-3653

9. 大会実行委員会

2006年大会実行委員会

鈴木毅彦(委員長)・小野 昭・山崎晴雄・大石雅之(いずれも首都大)

シンポジウムのプログラム

「人類の環境を第四紀学から考える - 過去から見た現在と未来」

シンポジウムの趣旨

日本第四紀学会は2006年春に創立50周年を迎えました。この50年間に社会は大きく変化し、人間の活動は自然環境を大きく変化させました。その結果一部では我々人類の生存を脅かす事態も発生しています。

第四紀学は人類が進化・発展してきた過去260万年間の環境を詳細に明らかにして、その変化の原因やメカニズムを探ろうとする科学です。このような過去の情報は地球環境の現在の位置づけを明らかにすると共に、将来の変化を展望することができます。よりよい未来を築いていくために、第四紀学に課せられた使命は決して小さくありません。

日本第四紀学会は創立50周年を契機に、過去の知識の蓄積を踏まえて新たな研究の展開をはかるため、2006年大会においては記念シンポジウム「人類の環境を第四紀学から考える - 過去から見た現在と未来」を企画しました。ここでは現在の第四紀学における主要な課題を4つのセッションに分け、延べ3日間に亘る研究発表と討論を行うことにしています。このシンポジウムに多くの方の参加をお願いいたします。

この他、50周年記念行事として、記念式典、記念出版、巡検、博物館との連携事業、そして2007年8月にはアジアに目を向けた国際シンポジウムの実施を計画しています。人類の未来を考える第四紀学の発展のため、皆様の一層のご支援・ご協力をお願いいたします。

8月4日(金) 13:00-13:10 開会あいさつ、シンポジウム全体の趣旨説明
「人類の環境を第四紀学から考える - 過去から見た現在と未来」
熊井久雄(50周年記念事業実行委員会委員長)

シンポジウム1:「最終氷期から完新世への急激な環境変動と人類」

8月4日(金) 13:10-18:00 (会場:講堂)

世話人:遠藤邦彦(日本大)・斎藤文紀(産総研)・小野 昭(首都大)・松浦秀治(お茶の水女子大)

趣旨:アジア・モンスーン変動の開始とその展開において第四紀が占める位置を明確にしながら、最終氷期から完新世にいたる急激な環境変動と人類・文化の変遷について、近年の国際的な動向や最新の知見を交えて報告する。前半ではステージ3やステージ2を中心に、後半はステージ2から1への急激な環境変動に焦点をあて、環境変動が人類の活動とその展開にいかに関わったかを中心に議論する。

- S1-01 13:10-13:15 「最終氷期から完新世への急激な環境変動と人類」趣旨
遠藤邦彦(日本大)・斎藤文紀(産総研)・小野 昭(首都大)・松浦秀治(お茶の水女子大)
- S1-02 13:15-13:45 急激なモンスーン変動の開始、時代変化と海洋環境へのインパクト
多田隆治(東京大)
- S1-03 13:45-14:05 サンゴと南極氷床～熱帯サンプルに記録された北半球および南極氷床の変動
横山祐典(東京大)
- S1-04 14:05-14:25 日本の氷河作用研究:近年の進展と展望
平川一臣(北海道大)
- S1-05 14:25-14:55 酸素同位体ステージ3問題と旧石器文化
小野 昭(首都大)
- S1-06 14:55-15:15 日本列島の「旧石器時代人骨」の現状と課題
松浦秀治(お茶の水女子大)
- S1-07 15:15-15:35 最終氷期末の日本列島における人類文化の諸問題
堤 隆(浅間縄文ミュージアム)
- 15:35-15:50 (休憩)
- S1-08 15:50-16:20 最終氷期最盛期以降の海面変動の沿岸域への影響と堆積物
斎藤文紀(産総研)

- S1-09 16:20-16:50 退氷期の日本に見られる、メカニズムと時間スケールの異なる二種類の気候変動:高分解能の花粉分析と定量的気候復元によって何が分かるか 中川 毅*(ニューカッスル大)*招待講演
- S1-10 16:50-17:10 日本列島の最終氷期~完新世の哺乳類-動物相の変化 絶滅現象および陸橋・氷橋問題 - 河村善也(愛知教育大)
- S1-11 17:10-17:30 完新世における縄文時代の放射性炭素年代と植物質食料資源利用 工藤雄一郎(都立大・院)
- S1-12 17:30-17:50 放射性炭素年代測定の高精度化と年代較正 中村俊夫(名古屋大)
- 17:50-18:00 シンポジウム1のまとめ

シンポジウム2:「鮮新・更新世の日本列島」

8月5日(土)9:00-11:30(会場:講堂)

世話人:真野勝友・河村善也(愛知教育大)・熊井久雄(大阪市立大名誉教授)

趣旨:最近の「Quaternary」を巡る年代層序問題に関連して、国際的に新しい年代区分が提案されている。これに関連して日本列島では、Quaternaryの基底とされるガウス/松山境界の層位を、岩相層序、生層序、古地磁気層序などから検討したい。

- S2-01 9:00-9:20 第四紀層序問題(問題提起と現状) 熊井久雄(大阪市立大名誉教授)
- S2-02 9:20-9:40 広域テフラ層による鮮新・更新統の対比 長橋良隆(福島大)
- S2-03 9:40-10:00 地磁気極性でさぐる第四紀の日本列島,アジアの黎明 兵頭政幸(神戸大)
- S2-04 10:00-10:20 日本の鮮新・更新統の長鼻類化石層序 樽野博幸(大阪市立自然史博)
- S2-05 10:20-10:40 鮮新・更新統の植物化石層序 百原 新(千葉大)
- S2-06 10:40-11:00 日本海拡大以降のテクトニクスからみた関東平野の活構造 高橋雅紀*(産総研)*招待講演
- 11:00-11:30 総合討論

シンポジウム3:「過去の間氷期の研究から今後の地球環境の変遷を考える」

8月6日(日)9:00-12:00(会場:講堂)

世話人:町田 洋(都立大名誉教授)・松島義章(放送大)・渡邊真紀子(東京工業大)・鈴木毅彦(首都大)

趣旨:氷床コアや海底コアの研究からは、完新世の温暖な気候・海面環境は第四紀の中で異例に長く安定したものであったと考えられている。この環境が将来どのように変わるかは、まず過去何回か繰り返された間氷期の変遷とその原因を解明し比較することから予測されるであろう。それは増大する人間活動の影響を考える場合の基礎となるに違いない。

- S3-01 9:00-9:10 シンポジウム3:「過去の間氷期の研究から今後の地球環境の変遷を考える」趣旨 世話人代表 町田 洋(都立大名誉教授)
- S3-02 9:10-9:40 海洋底コアのステージ11, 5e, 1の比較 大場忠道(北海道大名誉教授)
- S3-03 9:40-10:05 過去の間氷期の地質情報からみた現在 増田富士雄(同志社大)
- S3-04 10:05-10:30 氷期サイクルモデリングにおける間氷期の再現性と間氷期の決定要因 阿部彩子(東京大)
- 10:30-10:40 (休憩)
- S3-05 10:40-11:00 花粉層序によるステージ11, 5e, 1の比較 奥田昌明(千葉県立中央博)・三好教夫(岡山理科大)・竹村恵二(京都大・院)

- S3-06 11:00-11:20 古土壌の性状にみる温暖期と土壌生成作用
渡邊眞紀子(東京工業大)
- S3-07 11:20-11:40 ウラン系列年代測定法の問題点と最終間氷期に関する最近の成果
大村明雄(金沢大名誉教授)・佐々木圭一(金沢学院大)・稲垣美幸(金沢大)
- 11:40-12:00 総合討論

シンポジウム4:「環境問題・自然災害を第四紀学から考える」

8月6日(日)13:30-17:00(会場:講堂)

世話人:山崎晴雄(首都大)・三田村宗樹(大阪市立大)・杉山雄一(産総研)・久保純子(早稲田大)・水野清秀(産総研)

趣旨:地球温暖化,開発による生態系の破壊・汚染の進行,放射性廃棄物処分などの環境問題や地震・火山噴火・豪雨などによる自然災害は私たちの生活にとって深刻な問題である。それらの解決にむけて第四紀学はどのように貢献することができるであろうか。本シンポジウムでは第四紀学からの様々な研究の現状を紹介し,将来予測の可能性や課題などについて議論する。

- S4-01 13:30-13:35 シンポジウム「環境問題・自然災害を第四紀学から考える」趣旨説明
水野清秀(産総研)・山崎晴雄(首都大)・三田村宗樹(大阪市大)・杉山雄一(産総研)・久保純子(早稲田大)
- S4-02 13:35-13:55 地球温暖化と水循環の変化
増田耕一(地球環境フロンティア研究センター)
- S4-03 13:55-14:15 第四紀の氷床変動と地球回転変動・最近の海面上昇
中田正夫*(九州大)*招待講演
- S4-04 14:15-14:35 海域開発に伴う沿岸域生物群集の変化
佐藤慎一(東北大)
- S4-05 14:35-14:55 池堆積物に記録された人間活動による環境変化
吉川周作・村上晶子(大阪市立大)・石竹美帆(住化分析センター)
- S4-06 14:55-15:15 平野部の開発と地盤災害
三田村宗樹(大阪市立大)
- 15:15-15:30(休憩)
- S4-07 15:30-15:50 地層記録に基づく海溝型巨大地震の長期予測
藤原 治(産総研)
- S4-08 15:50-16:10 テフラからみた爆発的火山噴火の頻度と規模
鈴木毅彦(首都大)
- S4-09 16:10-16:30 まとめ・環境問題への第四紀学の役割 - 放射性廃棄物処分問題などを例にして -
山崎晴雄(首都大)
- 16:30-17:00 総合討論

一般研究発表(ポスターセッション)のプログラム

掲示期間:8月4日(金)午後~8月6日(日)夕方

コアタイム:5日(土)11:30~13:30,6日(日)12:00~13:30

会場:7号館スタジオ

- No. 講演題目.....著者
- P-1 赤道インド洋における過去80万年間の古地磁気永年変動
.....菅沼悠介(東京大)・山崎俊嗣(産総研)・金松敏也(JAMSTEC)
- P-2 中央ヒマラヤに記録された最終間氷期から最終氷期までのインドモンスーン変遷史
.....藤井理恵・酒井治孝(九州大学大学院)
- P-3 ボルネオ島熱帯雨林におけるフタバガキ科植物珪酸体の形態と動態
.....江口誠一(千葉中央博)・山倉拓夫(大阪市大)

- P-4 雑草からみた中国湖南省城頭山遺跡の稲作・アワ作農耕
 ・・・・那須浩郎(総合研究大学院大)・百原 新(千葉大)・安田喜憲(国際日本文化研究センター)
- P-5 Polygon 1.0: モダン・アナログ法による定量的な気候復元を、きわめて容易に実施するために新たに開発したソフトウェア ・・・・中川 毅(ニューカッスル大)
- P-6 鮮新-更新統におけるテフラ層序の再構築
 ・・・・里口保文(琵琶湖博物館)・長橋良隆(福島大)
- P-7 南九州の完新世海成段丘と鬼界アカホヤ火山灰 ・・・・森脇 広(鹿児島大)
- P-8 旧石器遺跡の鍵層となる御岳起源テフラのルミネッセンス年代測定
 ・・・・小畑直也・長友恒人(奈良教育大)・下岡順直(日本学術振興会特別研究員PD)
- P-9 塩嶺累層, 和田峠-霧ヶ峰地域の火山層序とフィッシュン・トラック年代
 ・・・・長井雅史(日大文理/明大文化財)・杉原重夫(明大文化財)・檀原 徹(京都フィッシュン・トラック)・岩野英樹(京都フィッシュン・トラック)・小森次郎(日大文理/明大文化財)・柴田 徹(明大文化財)・平野公平(明大文化財)
- P-10 斑晶鉱物の屈折率および主成分化学組成に基づくハヶ岳新时期テフラ群の給源火口の推定と北ハヶ岳の火山活動史 ・・・・大石雅之・鈴木毅彦(首都大)
- P-11 古地磁気, 広域テフラによる関東平野西縁, 加治(阿須山)丘陵の鮮新-下部更新統の層序と編年 ・・・・植木岳雪(産業技術総合研究所)・鈴木毅彦(首都大)・水野清秀(産業技術総合研究所)
- P-12 流紋岩質テフラの広域対比にもとづく伊豆諸島の噴火史再検討~伊豆大島 N_1 ガラス=新島向山テフラ, O_{58} 軽石=大室ダシ起源という提案~
 ・・・・齋藤公一滝(千葉大院・自然科学)・林 幸一郎(応用地質(株))・津久井雅志(千葉大・地球科学)
- P-13 第2函師タフとKd24, 登戸タフとKd11との対比に基づく多摩丘陵と房総半島のテフラ層序の再検討
 ・・・・田村糸子・山崎晴雄(首都大東京)・水野清秀(産総研)・下釜耕太(富士通パーソナル)
- P-14 犬吠層群における貝塩上宝テフラの層位と年代 ・・・・中里裕臣(農村工学研究所)
- P-15 男鹿半島北浦層上部(下・中部更新統)の火山灰層序
 ・・・・鈴木隼人・西川 治(秋田大)・長橋良隆(福島大)・白石建雄(秋田大)
- P-16 青森県東部に分布する正津川軽石流堆積物のフィッシュン・トラック年代と袋町テフラ群の岩石記載的特徴 ・・・・桑原拓一郎(産総研, 深部地質環境研究センター)
- P-17 沈み込むトランスフォーム断層が介在する地形-母島海山の成因-
 ・・・・藤岡換太郎(JAMSTEC/IFREE)・徳長 航(GODI), 横瀬久芳(熊本大学)
- P-18 人吉盆地南縁断層の最新活動時期-トレンチ調査による検討
 ・・・・水野清秀(産総研)・井村隆介(鹿児島大)・宮脇理一郎・宮脇明子・新谷加代(阪神コンサルタンツ)
- P-19 古琵琶湖層群の層相変化に基づく鈴鹿山脈の隆起過程
 ・・・・時実良典(日本土地評価システム)・山崎晴雄(首都大・院)
- P-20 テフロクロノロジーによる立川断層過去200万年間における活動史の復元
 ・・・・鈴木毅彦・村田昌則・大石雅之・山崎晴雄(首都大)・中山俊雄・川島眞一・川合将文(東京都土木技術センター)
- P-21 十日町盆地における縄文中期の笹山遺跡付近の地形と遺跡との関係
 ・・・・太田陽子(横浜国大名誉教授)・佐々木榮一(石油資源開発株)・伊倉久美子(横浜市役所)
- P-22 河成段丘面を指標にした第四紀後期隆起速度の再検討-北上低地帯胆沢地域を例にして-
 ・・・・松浦旅人(産総研)・古澤 明(古澤地質)
- P-23 男鹿半島湯本断層による海成段丘の変位ならびに石灰質温泉沈殿物の沈積
 ・・・・古橋恭子・西川 治・白石建雄(秋田大)
- P-24 明治大学調布付属校用地の遺跡(仮称)の調査(1)-考古遺跡の発掘調査から第四紀総合研究へ

-安蒜政雄(明治大)・野口 淳(明治大)・上杉 陽(都留文科大)・上本進二(神奈川災害史研究会)・坂上寛一(東京農工大)・宇津川 徹(東京農工大)・須永薫子(東京農工大)・平山良治(国立科学博)・竹迫 紘(明治大)・會田信行(千葉県立佐倉東高)・松田隆夫(府中市生涯学習センター)・久保純子(早稲田大)・菊地隆男(立正大)・中井 均(都留文科大)・細野 衛(東京自然史研究機構)・佐瀬 隆(北方ファイトリス研究室)・林 和広(東京大)・近藤 敏(市原市文化財センター)・明治大学校地内遺跡調査団・(株)パレオ・ラボ
- P-25 立川礫層最表層部の層位と堆積環境 - 明治大学調布付属校用地の遺跡ピットT164の例 - ; 明治大学調布付属校用地の遺跡(仮称)の調査(2)礫層
.....中井 均・上杉 陽(都留文科大)・野口 淳(明治大)・明治大学校地内遺跡調査団
- P-26 明大校地内遺跡の土壌生成環境と一次鉱物
.....宇津川 徹(カテナ研究所)・坂上寛一(星槎大学)・明治大学校地内遺跡調査団
- P-27 野川~多摩川間の考古遺跡における立川ローム層序対比とAMS年代 - 明治大学調布付属校用地の遺跡(仮称)の調査(4) -
.....野口 淳(明治大)・藤根 久((株)パレオ・ラボ)・佐々木由香((株)パレオ・ラボ)・(株)パレオ・ラボ年代測定グループ・明治大学校地内遺跡調査団
- P-28 包含層としての土壌堆積物の自然形成過程と遺物拡散 - 明治大学調布付属校用地の遺跡(仮称)の調査(5) -
.....林 和広(東京大・院)・野口 淳(明治大)・明治大学校地内遺跡調査団
- P-29 明治大学調布付属校用地の遺跡(仮)における後期旧石器時代の遺物出土地点および周辺の土壌微細構造の特徴 - 明治大学調布付属校用地の遺跡(仮称)の調査(6) -
.....須永薫子(東京農工大)・平山良治(国立科学博物館)・坂上寛一(星槎大)・明治大学校地内遺跡調査団
- P-30 武蔵野台地における後期旧石器時代遺跡立地 - Geoarchaeology の視点 -
.....伊藤 健(東海大・非, 都埋文)・比田井民子(都埋文)・西井幸雄(埼玉県埋文)・野口 淳(明治大学校地内遺跡調査団)・山岡拓也(東京都立大・院)・藤田健一(明治大学校地内遺跡調査団)・林 和広(東京大・院)・飯田茂雄(明治大・院)
- P-31 武蔵野 - 立川ローム層の植物珪酸体群集変動
.....佐瀬 隆(北方ファイトリス研究室)・町田 洋(都立大名誉教授)・細野衛(東京自然史研究機構)
- P-32 黒曜石の被熱に関する実験考古学 - 旧石器時代住居状遺構の再検討から -
.....坂下貴則(首都大・大学院)
- P-33 福岡県北九州市黒崎城跡(遺跡)における完新世中期以降の環境変遷 - 特に縄文時代の“礫積み遺構”について -
.....野井英明(北九州市大文学部)・太田泰弘(北九州市立自然史・歴史博物館)・梅 惠司(北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室)
- P-34 黒曜石原石の微量元素組成 - 石器の原産地を求めて -
.....新藤智子・中井弥生・福岡孝昭(立正大・地球)・佐野貴司(科博)・杉原重夫(明大・文)
- P-35 海底堆積物中の漂流岩屑からみた日本海北部の海水の消長
.....池原 研(産総研)・木戸芳樹・多田隆治・SunYoubin(東京大・院)・入野智久(北海道大・院)
- P-36 日本の更新世中・後期における古気候の高精度解析の現状と課題
.....公文富士夫(信州大・理学部)
- P-37 中部琉球喜界島に分布する最終間氷期のサンゴ礁堆積物
.....稲垣美幸・大村明雄(金沢大)
- P-38 丹波高地神吉盆地および琵琶湖高島沖堆積物の花粉分析に基づく最終間氷期以降の気候変動に対する植生の応答
.....林 竜馬・高原 光(京都府大院・農)・壇原 徹(京都フィッシュントラック)・吉川周作(大阪市大・理)・井内美郎(愛媛大・理)
- P-39 河内平野における完新世の水域環境の変遷と底生有孔虫群集変化

-辻本 彰(大阪市大)・三瓶良和(島根大)・吉川周作(大阪市大)
 P-40 矢作川河床埋没林周辺における完新世の地形環境変遷
小野映介・海津正倫(名古屋大)・森 泰通・杉浦裕幸・松井孝宗(豊田市郷土資料館)・河合仁志(岡崎市教育委員会)
 P-41 静岡県伊東市池で採取されたボーリングコアの層序と花粉分析
神谷千穂・叶内敦子・杉原重夫(明治大学)
 P-42 長野県高野層 TKN-2004 コアに基づく更新世後期の古環境変遷の解明
田原敬治・河合小百合・角田尚子・伊藤拓馬・公文富士夫(信州大学)・長橋良隆(福島大学)・叶内敦子(明治大学)
 P-43 新潟市佐潟西部における湿地環境拡大縮小の歴史的変遷
本郷美佐緒・卜部厚志(新潟大学災害復興科学センター)・安井 賢(新潟基礎工学研究所)
 P-44 関東構造盆地東部における後期更新世の海岸平野の形成過程
岡崎浩子(千葉県立中央博物館)・中里裕臣(農村工学研究所)
 P-45 茨城県北西部丘陵に分布する第四系の層序と年代
大井信三(国土地理院)・山家慎之介・安藤寿男・岡田 誠(茨城大)
 P-46 横浜南西部の上部更新統から見つかった熱帯種タイワンシラトリ化石
田口公則・松島義章・大島光春・樽 創・神奈川県博古生物ボランティア(神奈川県立生命の星・地球博)
 P-47 北関東北西部, 利根川流域の火山コントロール段丘
竹本弘幸(日本大学文理学部)
 P-48 武蔵野台地の地下水涸渇と提案羽鳥謙三
 P-49 多摩丘陵造成法面の幼齡アカマツ植林におけるアカマツ花粉粒生産量
清永丈太(東京都)
 P-50 千葉県小櫃川河口域における珪藻遺骸の分布特性
千葉 崇・遠藤邦彦(日大文理)
 P-51 常磐海岸北部のラグーン堆積物中に挟在する津波砂層堆積物
後藤秀昭(福島大)
 P-52 秋田県北部能代平野における段丘群の発達について
岩谷 晃(秋田大・院)・白石建雄(秋田大)
 P-53 男鹿半島, 脇本城跡の立地に関わる地形栗山知士(能代市立能代商業高校)
 P-54 秋田県南西部子吉川水系における段丘発達と出羽丘陵
館 良和(秋田大学院)・白石建雄・西川 治(秋田大)
 P-55 秋田県男鹿半島南岸における中部更新統鮪川層の堆積相解析
星多恵子・白石建雄・西川 治(秋田大)・長橋良隆(福島大)
 P-56 北海道南西部, 胆振海岸平野堆積物中にみられる黒灰色砂礫層の起源について
佐藤明夫(日本大・院)・鈴木正章(道都大)・遠藤邦彦(日本大)
 P-57 植物珪酸体群集からみた北大雨龍研究林泥川湿原における完新世以降の湿原植生の変遷
河野樹一郎・野村敏江・高原 光(京都府大)・北川浩之(名古屋大)・柴田英昭・植村 滋(北大)・佐々木尚子・吉岡崇仁(総合地球環境学研究所)
 P-58 人工衛星データとDEMによる地表の季節変動の観察
黒木貴一(福岡教大)・磯 望(西南大)・後藤健介(長崎大)
 P-59 LANDSAT データによる北部九州の地表の季節変動
西木真織(西南大・院)・磯 望(西南大)・後藤健介(長崎大)・黒木貴一(福教大)
 P-60 長崎市西山貯水池堆積物中の長崎原爆「黒い雨」の痕跡
國分(齋藤)陽子・安田健一郎・間柄正明・宮本ユタカ・桜井 聡・臼田重和(原子力機構)・村上晶子・井上 淳・吉川周作(大阪市大)・山崎秀夫(近畿大)・長岡信治(長崎大)
 P-61 島根・鳥取県中海堆積物に記録された20世紀の汽水環境変化:柱状試料のマルチプロキシ分析による検討
山田和芳・宮本 康・山口啓子・高田裕行・香月興太・都筑良明(島根大)

- 坂井三郎(JAMSTEC)・H. Coops(RIZA)・野村律夫・國井秀伸(島根大)
 P-62 大阪湾における人為改変・水質汚染に対する珪藻群集の応答
 ・・・・廣瀬孝太郎(大阪市大)・安原盛明(USGS)・山崎秀夫(近畿大)・吉川周作(大阪市大)
 P-63 化石燃料燃焼由来の球状粒子を用いた産業活動の歴史トレンド解析 - 都市部間における地域的变化 広島湾・大阪湾との比較 -
 ・・・・村上晶子・杉谷寿子・吉川周作(大阪市大・院)
 P-64 露光確率からみる河川堆積物のOSL年代測定用試料採取方法:堆積学的見地からの提案
 ・・・・白井正明(東京大・海洋研)
 P-65 石英を用いた北海道北部,宗谷丘陵における周氷河作用のOSL年代測定
 ・・・・近藤玲介(明治大)・塚本すみ子(ウェールズ大)
 P-66 歴史地震で隆起した貝化石を用いた三浦半島南部における海洋リザーバー効果の評価
 ・・・・宍倉正展(産総研・活断層研究センター)・越後智雄(地域地盤環境研究所)・金田平太郎(産総研・活断層研究センター)

日本第四紀学会50周年記念展示と兵庫県立人と自然の博物館ミニ企画展

50周年記念事業実行委員会では,その事業の一環として学会の50周年を記念し学会の活動を紹介する展示を関東,中部,関西の各地区1ヶ所の自然史系博物館を会場として行うことに致しました.学会のこれまでの歩みや現在の姿,あるいは今後の展望など学会活動全般について,会員だけでなく広く一般の方々にも知っていただくことがその目的です.今回はその第2弾として関西地区の兵庫県立人と自然の博物館と共催で,そのような展示を行います.この後は関東地区の産業技術総合研究所地質標本館で同様の展示を行う予定になっています.

今回展示を行う兵庫県立人と自然の博物館では,ミニ企画展「自然史からみた兵庫の海 - 地層や化石で知る100万年のおいたち -」が9月9日(土)から開催されます.このミニ企画展では,兵庫県の豊かな自然のうち,その海に焦点を当てての紹介が行われます.第四紀に関連する県内産の貝化石やナウマンゾウ化石,材化石など多くの標本が展示されます.

第四紀学会の50周年記念展示は,このミニ企画展の会場内に設置されます.会員の皆様には是非この機会に兵庫県立人と自然史博物館を訪れていただき,学会の活動についての認識を深めていただくとともに,博物館のミニ企画展を見学していただきたいと思っております.兵庫県立人と自然の博物館の詳細についてはホームページ(<http://www.hitohaku.jp>)をご覧ください.

住所:兵庫県三田市弥生が丘6丁目(神戸電鉄「フラワータウン駅」下車すぐ,または中国自動車道「神戸三田IC」より車で5分)

電話:079-559-2003(生涯学習推進室)

開催期間:2006年9月9日(土)~11月5日(日)

ミニ企画展 **自然史からみた兵庫の海**
 - 地層や化石で知る100万年のおいたち -

2006.9.9.~11.5.
 兵庫県立人と自然の博物館
 3F 小企画展示室

ヒトデ化石(舞子貝層) ムカシチヒロ

日本第四紀学会
 50周年記念事業

日本第四紀学会50周年記念展示と産総研地質標本館特別展のご案内

50周年記念事業実行委員会では、その事業の一環として学会の50周年を記念し学会の活動を紹介する展示等をいくつかの自然史系博物館を会場として行うことに致しました。すでに「第四紀通信」でご案内しているように、その第1弾は中部地区の豊橋市自然史博物館、第2弾は関西地区の兵庫県立人と自然の博物館で、ここに紹介するのは第3弾の関東地区の展示です。関東地区では、産業技術総合研究所地質標本館の以下のような特別展に協賛して、第四紀学会のコーナーを設けて紹介を行うと共に、旧石器文化に関するパネル展示と普及講演及び石器製作の実演を本学会が担当いたします。詳細については、地質標本館のホームページ (<http://www.gsj.jp/Muse/>) を参照してください。

特別展「人類と社会の未来をつなぐ地質時代 日本の第四紀研究50年」

主催：(独)産業技術総合研究所 地質標本館

協賛：日本第四紀学会

期間：2006年10月3日(火)～11月12日(日)

[ただし、毎週月曜日(祝日の場合は火曜日)及び10月8日(日)は休館]

場所：地質標本館ホール 茨城県つくば市東1-1-1

展示内容(予定)：

袖ヶ浦の脊椎動物化石群・花室川のナウマンゾウ化石及び近辺の石器標本、筑波の環境地質図、霞ヶ浦、関東平野の沖積層、地中レーダー探査、活断層、海溝型地震イベント、地震災害、火山、旧石器文化等に関するパネルほか。

普及講演：10月14日(土)

午前中 石器の製作実演

13:30～ 兼子尚知(産業技術総合研究所地質情報研究部門)

千葉県袖ヶ浦市の脊椎動物化石群と共産化石からみた古環境

14:30～ 小野 昭(首都大学東京考古学研究室)

日本列島の旧石器文化

熱帯アジア海岸平野の津波被災地域における自然災害軽減に関する国際会議のお知らせ（第1報）

2004年12月26日に発生したスマトラ島沖巨大地震によって引き起こされた津波は、インド洋沿岸地域に多大な被害を引き起こした。この津波による海岸平野への影響と今後の自然災害軽減に関する問題を自然科学的側面から検討する国際会議が本年8月31日～9月1日にタイ国プーケットにて開催される。主催は日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業の「地域特性に基づく熱帯アジア臨海域の自然災害軽減に関わる研究連携」プロジェクト（研究代表者：海津正倫）で、日本第四紀学会海岸線委員会も共催する。参加ご希望の方は海津正倫（umitsu@cc.nagoya-u.ac.jp）または下記のサーキュラーに示す連絡先にご連絡ください。

FIRST ANNOUNCEMENT AND CALL FOR PAPERS

International Conference on the Mitigation of Natural Disasters in the Tsunami
Affected Coastal Regions of Tropical Asia

31st August – 1st September 2006
Phuket, Khao Lak, Nam Khem and Ranong
Southwest Thailand

Asia and Africa Science Platform Program, JSPS
Nagoya University, Japan
Prince of Songhla University, Thailand
Kasetsart University, Thailand
Coastal Research Committee, Japan Quaternary Science Association

ORGANIZING COMMITTEE

Chief Organizer	Professor Masatomo Umitsu, Nagoya University, Japan
Local Organizer	Dr Charlchai Tanavud, Prince of Songkhla University, Thailand
Secretariat	Dr Taro Sasaki, Forest Economic Research Institute, Japan Dr Makoto Takahashi, Nagoya University, Japan
Website	http://www.geog.lit.nagoya-u.ac.jp/aaplat/

INVITATION TO THE CONFERENCE

We are pleased to extend an invitation to the International Conference on the Mitigation of Natural Disasters in the Tsunami Affected Coastal Regions of Tropical Asia, supported by the Asia and Africa Science Platform Program, Japan Society for the Promotion of Science (JSPS), including Workshop and Field Excursion. The conference will be held in Phuket Province, Southern Thailand.

As we all recall, a huge tsunami resulted from giant earthquake that occurred off the northwest coast of Sumatra, Indonesia, on 26th December 2004, severely damaging the regions of the Andaman Sea Coast of Southwest Thailand, and Banda Aceh and Nanggroe Aceh Darussalam, Indonesia. In order to facilitate the sharing of information about this tsunami, and to discuss the mitigation of such natural disaster, this conference is being convened in Phuket, one of the most seriously devastated cities.

The Conference will be organized in two parts: 1) a workshop on the physical aspects of the disaster, including research methodologies such as GIS/RS, and 2) a field excursion to the northern Andaman

Sea Coast of southwest Thailand, in particular focusing on the reconstruction processes and the mitigation systems concerning the local communities and reforestation schemes. Principle themes will include:

- Processes and mechanisms of the tsunami disaster from the physical perspective,
- Physical effects and devastation processes, and their relations to the land conditions/uses,
- Assessment, analysis and hazard information management, including GIS and RS,
- Risk and hazard management, including hazard and risk maps, and early-warning systems,
- Artificial environments for the mitigation of future potentially devastating events, including mangrove reforestation and infrastructures, etc.

The focal localities are the Western Coast of Southern Thailand, Northwest Sumatra and Japan. Indeed, the term tsunami is originated in Japanese, and Japanese society has a long history of experiences of tsunamis and earthquakes. It is therefore anticipated that sharing Japanese experiences with scientists from both Thailand and Indonesia through academic networking will be highly beneficial.

In this spirit, we welcome everyone who is interested in these topics to the Conference, and call for your participations. Please be noted that, in the Phuket Conference we will discuss on the natural and physical aspects of the tsunami, and discuss mitigation measures in these areas, but we plan another conference also which will focus on the socio-cultural and economic aspects of the tsunami effects, probably to be held in Banda Aceh around early December this year.

CONFERENCE PROGRAMME

WORKSHOP – DAY 1

On: 31st August 2006

At: Royal Paradise Hotel, Patong Beach, Phuket, Thailand

Consisting of: Opening Speech, Keynote Addressing, Paper Presentations and Discussions, and Conference Dinner

FIELD EXCURSION – DAY 2

On: 1st September 2006

Site visits to: The Andaman Sea Coast of Thailand, including Phuket, Khao Lak and Nam Khem, and the Andaman Coastal Research Center for Development of Kasetsart University in Ranong Province.

* This programme is provisional.

REGISTRATION INFORMATION

All participants must submit a registration form to the Conference Secretariat prior to 14th July 2006 (Friday), by email or fax.

All participants are responsible for their own transportation to/from Phuket and their own accommodation. Phuket International Airport has direct flights from many major cities in Southeast Asia, including Bangkok, Kuala Lumpur and Singapore. The Airport is located in the northern part of Phuket Island, approximately 40 minutes taxi drive from the downtown and Patong Beach. There are also plenty of excellent hotels, which can be easily located and booked through the Internet.

Accommodation cost at the venue of the conference, the Royal Paradise Hotel, Patong Beach, is approximately 1,200 Baht per room per night. Those who prefer a lower accommodation cost can stay at the PSU Lodge of Prince of Songhla University, Phuket campus (subject to availability). However, please note that the campus accommodation located quite far from Patong beach and it normally takes 30-40 minutes to go by car to the conference venue. A room with 2 double beds at the PSU Lodge costs 525 Baht per night. This rate covers one or two adults but no breakfast is provided.

CALL FOR PAPERS

Authors of papers and posters must submit the title and abstract of the paper to the Conference Secretariat, prior to 31st July 2006 (Monday). Please provide abstracts formatted in MS-Word as follows, ready for printing, and sent by email as an attached file.

Language: English.

Length: Maximum one A4 page (approx. 500 words). Type in Times New Roman, single-spaced, with all margins 2.5 cm.

Title of paper: Centered, upper and lower case, bold, 12-point font.

Leave two lines.

Author(s): Centered, lower case (first letter of name or initials caps), normal, 12 point font. First or given name or initials first, then surname or family name.

Leave one line.

Authors' affiliations and email addresses: Centered, lower case (first letters of affiliation caps), not bold, 10 point font. Use footnote numbers if affiliations differ for authors.

Leave two lines.

Text, 10-point font, single-spaced, justify right and left hand margins.

Leave one line between paragraphs. Do not indent start of paragraph. No figures and no tables.

We plan to publish the Conference proceedings early next year. Detailed information will be given following the Conference.

REGISTRATION FORM

Please email or fax this form to the Conference Secretariat with the following information.

Full Name: _____

Affiliation: _____

Title/Position: _____

Address: _____

Email: _____

@ _____

Please check the appropriate box:

- I will participate in:

Both Workshop and Field excursion

Only Workshop

Only Field excursion

- Paper/Poster Presentation:

I will present a paper.

I will present a poster.

I will not present.

- Accommodation:

Please reserve my accommodation at the Royal Paradise Hotel.

Please reserve my accommodation at the PSU Lodge.

I will arrange accommodation for myself.

CONTACT

Conference Secretariat Dr Makoto Takahashi
Department of Geography
Graduate School of Environmental Studies
Nagoya University
Chikusa-ku, Nagoya 464-8601 Japan
Phone/Fax: +81 52 7894743
Email: makoto-t@info.human.nagoya-u.ac.jp

International Workshop on Blind dip-slip faulting and strain partitioning in an active orogen のご案内

INQUAの subcommission on Paleoseismicity の活動の一環として、造山運動におけるひずみ分配と伏在断層に関するワークショップが2007年3月にベネズエラで開催されます。この会合に参加を希望される方は、末尾の選考登録申込みに必要な事項を主催者の一人である Franck Audemard 氏(faudemard@funvisis.gob.ve)宛にご連絡下さい。

ネオテクトニクス研究委員会代表 吾妻 崇

International Workshop on Blind dip-slip faulting and strain partitioning in an active orogen: the Merida Andes case, Venezuela Santo Domingo, Merida State, Venezuela (March 5-9, 2007)

<<FIRST CIRCULAR>>

The INQUA Commission on Terrestrial Processes, Deposits and History, through its Neotectonics and Paleoseismicity subcommissions, jointly with the Inter-national Association of Geomorphologists (IAG), and the Venezuelan Foundation for Seismological Research (FUNVISIS) have the great pleasure of inviting you to join us in the Workshop Blind dip-slip faulting and strain partitioning in an active orogen: the Merida Andes case, Venezuela to be held in Santo Domingo, Merida state, Venezuela, from March 5 through 9, 2007. The Merida Andes, as an active transpressional orogen undergoing strain partitioning and blind thrusting in both flank foothills, is a spectacular locality to illustrate such processes. Consequently, a three-day fieldtrip to the foothills thrust fault and the chainparallel dextral Boconó fault (including visit to existing trench excavation sites), is programmed, previous to a two-day-long section of presentations and discussion.

Besides being a forum on stress or strain partitioning in active orogens, the aim of this event is to discuss the recognition and characterization of active dip-slip blind faults, because they have proved to be harmful to populated and industrial areas settled on active plate boundaries. This meeting should also be an occasion to clarify and better constrain the current definitions of buried, blind, sealed and concealed fault. The official language of the Workshop is English, and no simultaneous translation will be provided.

Special participation of Latin American colleagues is sought. In that sense, six grants will be provided for young earth scientists from the region, and particularly three of them for young geomorphologists. The grants in all cases include waiving of the registration fees. IAG grants for young geomorphologists will only cover travel expenses up to US \$ 500 and INQUA grants should assure attendance of less favored applicants.

To promote the regional participation, the cost of attendance to this event is to be kept the lowest. Consequently, registration fees are:

* Non-Latin-American participants----- US \$ 250

* Latin-American participants-----US \$ 100

This includes: two-way Caracas-Apartaderos coach transportation, fieldtrip guidebook, and lunches and beverages during the three-day-long fieldtrip. The workshop venue will be the Hotel Santo Domingo, in Santo Domingo, Merida state. This hotel is conveniently placed in the central axial valley of the Merida Andes, at some 2200 m of elevation, hosting a mild climate, both at day and night. In March, we hope to be in the middle of the dry season, which should keep rain at a minimum. However, raincoat and umbrella are recommended throughout the year, as well as a light jacket or windcoat, and a cap or hat.

Cost of hotel accommodation and meals at the Hotel Santo Domingo are rather unexpensive. An estimate of US \$ 65 a day should be largely enough to cover both, for a single occupancy. Individual prices can be significantly lowered by sharing rooms or cabins (down to US \$ 50 for triple occupancy). Those interested in submitting a contribution to the Workshop are asked to send their abstracts electronically to Franck Audemard before October 31st, 2006. The sooner you send your contribution, the faster the Workshop programme is set.

For grant selection, priority will be given to applicants submitting an abstract. They are also asked to send in an extended curriculum vitae to the email address provided below. The abstract should be written in english, a page long at most, using Times New Roman font, single-spaced justified text, with 3 cm margins all around. The abstract should contain in strict order: a centered title in bold capital letters; complete name of author(s) (first name and surname; only family name in upper case), separated from title by a blank line; affiliations should come after, separated from authors by an empty line, in the same order as of the authors and indicating only e-mail of the corresponding author. Text of the abstract should be next, separated by two lines. Highquality, b&w or color, figures are accepted.

Organizing Committee:

Franck A. Audemard M. (FUNVISIS, Caracas, Venezuela)
 Christian Beck (Universite de Savoie, Chambéry, France)
 Alessandro M. Michetti (Universita dell'Insubria, Como, Italy)
 Reinaldo Ollarves (FUNVISIS, Caracas, Venezuela)

Pre-registration form (return to faudemard@funvisis.gob.ve)

Full name:

Affiliation:

Address:

e-mail:

Tentative abstract title:

金沢21世紀COEシンポジウム

「東アジアの大気環境汚染と健康・生態系への影響」

Atmospheric pollution of East Asia and its effects on ecosystem and human health

日時：2006年9月23日

場所：東京大学弥生講堂

HP URL: <http://earth.s.kanazawa-u.ac.jp/chronology/Air/homeJ.html>

詳しい情報は担当者（長谷部徳子，hasebe@kenroku.kanazawa-u.ac.jp）にお聞きください。

本学会倫理憲章策定とその後の経過

2006年6月18日
知的財産権等検討委員会

日本第四紀学会は2005年8月27日の総会（島根大会）で倫理憲章を承認し、あわせて、会則改定を行い、その第2章[会員]の項において、「会員は会則と倫理憲章を遵守する義務を負う。」と明記いたしました。本年4月には「知的財産権等検討委員会」を設置し、新たに策定された倫理憲章を根拠とした諸規定の整備検討を進め、8月の評議員会・総会での提案をめざしております。以下に、倫理憲章策定に到る背景、倫理憲章の主旨、その後の今日までの検討経過について、報告させていただきます。

日本第四紀学会倫理憲章
(2005年8月27日、総会にて決定)

前文

本会は、人類を産み育ててきた地球の環境変動を、人類が地球に与えてきた様々な影響とともに科学的に調査研究し、成果を広く社会に普及する事を目的とする。また、内外の関連学協会と協調し、人類社会の持続的発展と地球環境及び生物多様性の保全に貢献することを希求する。

1. 科学者・教育者としての倫理

会員は、専門知識と技術の向上をめざして自己研鑽を図るとともに、本学会を構成する諸分野の相互理解にも努める。調査研究および教育普及にあたっては、基本的人権の尊重の上になつて、法を遵守し社会的良識に従って行動する。

2. 知的交流の促進

会員は、得られた成果が広く吟味・検証されるべく努め、専門知識と技術を活用して他分野との交流を促進する。また、調査研究の公表にあたっては先行研究と他者の業績を正当に評価する。

3. 人類社会への責務・地球環境への責務

会員は専門的な知識や立場を活かし、地球環境の過去・現在・未来について、社会に対する適切な情報提供に努める。自らの調査研究の実施にあたっては、環境への影響を適切に評価し、影響を最小限に押さえるべく努め、地域の人々の信頼と尊敬を獲得するべく努力する。

4. 次世代への責務

会員は、次世代を担う人材の育成に努めるとともに、調査・研究の成果物、標本、試資料、露頭、遺跡、景観など、諸遺産の保護・保全に努める。

1. 何故、倫理憲章策定が必要だったのか？

日本が高度情報化社会～科学技術社会に移行するにつれ、学界（技術界を含む）の調査研究成果が、従来にはない速度で国民生活に浸透するようになりました。信頼性の高い正確な情報を多様な手段で迅速かつ公平に国民にあるいは国際社会に情報発進することが可能となりましたが、同時に、不正な情報の流布を事前に阻止し、流布した場合には放置せず迅速に対処することも重要な課題となりました。

上記のような趨勢に鑑み、1996年に「科学技術基本法」が制定されました。その第二期（平成13-17年度：2001-2005年度）科学技術基本計画では、「科学技術に関する倫理と社会的責任」という章に「研究者・技術者の倫理」なる項目が設けられ、各学協会に「守るべき倫理に関するガイドラインの設定」を求めました。また、「説明責任とリスク管理」という項目で、「国民と研究者の双方向コミュニケーションの充実 や科学技術活動に伴うリスクを最小化するよう適切な管理を行うとともに、組織における倫理の涵養に努めること」を求めました。

これを受けて、日本学術会議「学術と社会常置委員会」は2003年6月24日付で、「科学における不正行為とその防止について」と題する提言を学術会議に提出しました。

その「まとめと提言」の後段で、『科学における「不正行為」は、科学と社会の関係が緊密になり科学の社会的役割が大きくなった現在、人々の生存、生活、福祉に重大な影響を与え、基本的人権や人間の尊厳を傷つける結果にもなりかねない。そのことはまた、ひるがえって、科学に対する社会的評価を損ない、科学と科学者に人々が託した夢と信頼を裏切ることとなる。「不正行為」の防止は、したがって、科学者コミュニティが社会に対する説明責任を果たし、「科学者が広く国民から、評価され、尊敬される社会」（『科学技術白書』）を築くためには不可欠な実践的課題であり、「負託自治」の倫理の核心をなす責務である。』と述べ、「事前の対策（予防策）」の項で「学会、研究機関は倫理規定、行動規範を整備し、構成員の教育に努力すべきである。最近、この種の規定を整備する学会が増えつつある。しかし、学術雑誌の投稿規定についても不備なものが多く、明確な基準を決定し公表することを徹底すべきである。・・・」としました。

こうした社会的要請を受け、各学協会は、倫

理憲章(倫理綱領、行動規範など)策定を急ぎ、それを根拠に、新しい時代にふさわしい会則・諸規定の整備を進めております。

2. 本学会倫理憲章の主旨

各学協会の倫理憲章～倫理綱領～行動規範は一般に簡潔です。そのため、別途、主旨説明をつける例があります。本会は幅広い11もの分野の連合学会であり、個々の分野の慣行も異なるため、趣旨説明が必要と判断します。本学会の倫理憲章は、前文と本文4項から構成されます。

前文は、第四紀研究の内容を国民向けに解説したものです。学会誌「第四紀研究」の裏表紙の「地球のヒトから人間の地球へ以下5行」の文言を参考にしました。また、ここでは、調査研究成果を広く普及する事も本会の目的であることを宣言しています。さらに「関連学協会と協調し人類社会の持続的発展と地球環境及び生物多様性の保全に貢献することを希求する」との理想を掲げました。

第1項[科学者・教育者としての倫理]は、本会は学会であること、学会である以上、会員は、それぞれの専門知識と技術の向上をめざして自己研鑽を図る姿勢が必要であることを宣言しています。また、本会が単一分野からなる学会ではなく、11もの広範な分野の連合学会であることから、会員は「本学会を構成する諸分野の相互理解にも努める」としました。さらに、他学会とほぼ同様ですが、「調査研究および教育普及にあたっては、基本的人権の尊重の上にあつて、法を遵守し社会的良識に従って行動する」ことを宣言しています。本会会員の中には海外の方もおられるので、日本の法律を遵守すべしとは書いてありません。

第2項[知的交流の促進]も他学会とほぼ同様です。会員に本学会内に閉じこもることなく、「得られた成果が広く吟味・検証されるべく努め、専門知識と技術を活用して他分野との交流を促進する」ことを求めています。また、「調査研究の公表にあたっては先行研究と他者の業績を正當に評価する」として、本項で、「不正行為の防止」に努めることを宣言しました。なお、各学協会が、倫理憲章(倫理綱領・行動規範)の中で、ある意味で、倫理宣言にふさわしくない「不正行為の防止」を、わざわざ謳わなければならないのは、現在の日本では、「発明や工夫」は知的財産権保護の法的対象となるが、「科学的発見やアイデア」は対象にならないという事情があります。現行著作権法ないしはその解釈論では、「科学的発見やアイデアのプライオリティー」を守ることは容易ではありません。学会が自らガイドラインを設定し、ゆだねられた著作物を、自ら守らねばならない現

実があります。

[注記] 新版「著作権事典」(社団法人著作権情報センター編著、文化庁内著作権法令研究会監修)の216頁には「1967年(昭和42年)にストックホルムで採択された『世界知的所有権機構を設立する条約』の2条()では、知的所有権を定義して「文芸、美術および学術の著作物、実演家の実演、レコードおよび放送、人間の活動の全ての分野における発明、科学的発見、意匠、商標、サービスマークおよび商号その他の商業的表示、不正競争に対する保護、に関する権利並びに産業、学術、文芸又は美術の分野における知的活動から生ずる他のすべての権利をいうものとしている」と紹介されています。そして、「わが国の法制では科学的発見に関する権利はまだ認められておらず」としています。

第3項[人類社会への責務・地球環境への責務]では、前文に謳った普及活動の進め方について、「専門的な知識や立場を活かし、地球環境の過去・現在・未来について、社会に対する適切な情報提供に努める」としました。同時に、本学会を広く人々に理解していただくためには、会員が学問至上主義に陥ることなく、「自らの調査研究の実施にあたっては、環境への影響を適切に評価し、影響を最小限に押さえるべく努め、地域の人々の信頼と尊敬を獲得するべく努力する」ことが必要であるとしました。

第4項[次世代への責務]では、「会員は次世代を担う人材の育成に努めるとともに、調査・研究の成果物、標本、試資料、露頭、遺跡、景観など、諸遺産の保護・保全に努める」としています。趣旨は他の学協会と同じですが、本会は分野が広いことから、保護・保全の対象として、特に「露頭、遺跡、景観など」を明記しました。会員の皆様が、それぞれの分野、それぞれの生活地域において、広く本項を生かされることを期待します。

3. 知的財産権等検討委員会中間報告

旧倫理憲章策定委員会(会員から上杉 陽・坂上寛一/幹事会から小野 昭・真野勝友)は、2005年8月評議員会への倫理憲章案提案を終えて解散し、今期は本会著作物に係わる諸規定の整備再検討をめざして、知的財産権等検討委員会(旧委員会から上杉 陽・坂上寛一・真野勝友/幹事会から池原 研・遠藤邦彦)が設置されました。現在は、幹事会と連携し、本会の様々な著作物のリストアップ、それぞれにあった著作財産権・著作人格権の保護のあり方等を検討中です。これまでに、以下のような検討を行い、5月15日臨時評議員会に報告しています。1)2005年5月に結成された日本地球惑星科学

連合(本会も参加)にも科学技術基本法に基づく諸指針は適用されるので、同連合全体として、倫理綱領などが整備されて行くであろう。その際に、加盟各学協会の知的財産権等の保護に関する諸規定に整合性があるべきであり、本会としては、顧問弁護士の出席のもとで、先行して諸規定の整備を進めてきた日本地質学会の諸成果を生かす方向で検討する。

2) 本会が出版したものについては、最終的には、本会も何らかの形で責任を負わねばならない事は明らかである。法的には、全ての投稿原稿などの著作物について、「保証書への署名捺印」と「著作権など譲渡同意書への署名捺印」が望ましく、また、本会著作物の転載に当たっては、「転載許可申請書」を提出していただき、学会として、「転載許諾書」を発行し、同一著作物については、以後は学会が代わって、転載許諾書を発行するための「転載許諾委任状」の提出を併せて求める事が望ましい。また、本会著作物の様々な利用を円滑に行っていただくためにも、あらかじめ著作物利用規定を定めてお

く必要がある。その際に、著作者(著作人格権者)自身による利用の優遇措置を明記しておくべきである。その上で、著作物利用許可証を発行することになる。

こうした諸規定は、本会学術誌「第四紀研究」に関しては、速やかに適用されるべきと考えるが、その他の様々な出版物、たとえば、特別出版物、講演要旨集、見学旅行案内書、講習会用パンフレット、第四紀通信、日本地球惑星科学連合大会での本会担当部分の講演要旨については、それぞれの果たすべき役割や本会の「会としての体力」を考えて、どこまで適用可能か、慎重に判断すべきである。しかしながら、本会の維持発展のためには、本会が著作財産権を有する印刷物などを質量ともに増やしていくことが必要であり、適用対象を将来的には拡大すべきである。

3) 平行して進められている本会 50 周年記念 CD 出版に当たっては、制定済みの倫理憲章を根拠に先行して事業を進める(評議員会了承)。

以上

名誉会員の推薦について(2006.5.15 臨時評議員会)

名誉会員候補者選考委員会 坂上寛一(委員長)・大場忠道・小野 昭

日本第四紀学会会則(別記1;略)および名誉会員選考基準(別記2;略)に基づき、名誉会員候補者を選考すべく協議いたしました。その結果、本会の会長・長年の評議員、日本学術会議第四紀研究連絡委員会委員長、あるいはINQUA(国際第四紀学連合)の役員などを務められ、第四紀学の発展に多大のご尽力をいただき、また長年の研究上、研究組織上の功績がまことに顕著な下記の10名の会員を、本会の名誉会員候補者として推薦いたします。

記

名誉会員候補者と主な推薦理由

市原 実 (地質)	1925 生	INQUA 名誉会員(2003~)
糸魚川淳二(古生)	1929	12 期にわたる評議員(1977~99)
太田陽子 (地理)	1928	INQUA 副会長(1995~99)
加藤芳朗 (地質・土壌)	1924	14 期にわたる評議員(1969~99)
阪口 豊 (地理)	1929	10 期にわたる評議員(1965~85)
杉村 新 (地質)	1923	INQUA 名誉会員(2003~)
鎮西清高 (地質)	1933	会長(1995~96)
土 隆一 (古生・動物)	1929	10 期にわたる評議員(1969~2005)
中川久夫 (地質)	1927	第四紀研連委員長(1988~90)
羽鳥謙三 (地質)	1927	15 期にわたる評議員(1956~93)

以上

日本第四紀学会50周年記念事業実行委員会報告(2006.5.15 臨時評議員会)

日本第四紀学会50周年記念事業実行委員会(委員長:熊井久雄、町田 洋、真野勝友、齋藤文紀、岩田修二、小野 昭、松浦秀治、松島義章、河村善也、渡邊眞紀子、御堂島 正、遠藤邦彦、杉山雄一、鈴木毅彦、久保純子、中村俊夫、山崎晴雄)

1. 2005年8月の総会以降7回の実行委員会を開催し、2006年8月の大会における国内シンポジウム、記念式典、記念懇親会、2007年8月の国際シンポジウム、募金活動、記念出版物、博物館連携などの諸事業の企画及び推進を行った。

2. 日本第四紀学会2006年大会では総会、国内シンポジウム、ポスターセッション、50周年記念式典、50周年記念懇親会を2006年8月4～6日に首都大学東京 南大沢キャンパス小講堂で、7～8日には南関東を中心とする巡検を実施する。なお、今回のシンポジウムは招待講演のみとし公募は行わない。また、一般講演は口頭発表を行わずポスターセッションのみの実施とする。

3. 国内シンポジウムは「人類の環境を第四紀学から考える - 過去から見た現在と未来 -」をメインテーマに、現在の第四紀学の主要な研究テーマに関連した1.最終氷期から完新世への急激な環境変動と人類、2.鮮新 - 更新世の日本列島、3.過去の間氷期の研究から今後の地球環境の変遷を考える、4.自然災害を第四紀学から考える、の4つのセッションを実施する。各セッションはいずれも半日の時間を割り当て、世話人が中心になって各テーマにふさわしい研究者に講演を依頼した。別紙にシンポジウムのプログラムと日程表を示す。

4. 記念式典を8月5日(土)午後、南大沢キャンパス小講堂で第四紀学会2006年総会に引き続いて開催する。式典では会長講演、来賓挨拶、功労者・永年会員の表彰・記念品贈呈を行う。

5. 記念懇親会を8月5日(土)18:00～多摩センターの京王プラザホテル多摩で開催する。

6. 巡検は8月7～8日に日本における第四紀学の発展に関連した南関東の主要サイト(露頭や遺跡)を巡り、遺跡の現状や保存について様々な角度から検討する。大型バス1台、募集人員40名で多摩丘陵・大磯丘陵・三浦半島・房総半島を訪れる。

7. 国際シンポジウムは2007年8月20～22日に茨城県つくば市の産総研共用講堂で開催する。シンポジウムは独立行政法人産業技術総合研究所との共催とし、日本の第四紀研究を世界へ展開させるために、そして、アジア地域の第四紀研究との連携をはかるため、タイトルを「アジア・太平洋の第四紀 - 環境変化と人類 -」と設定し、アジア各国の代表およびINQUAからの代表者を招いて21世紀にふさわしい会合を開催する。

8. 募金事業:2006年2月から募金事業を開始した。4月28日現在、募金者数126名、募金総額152万円である。この募金では2口(10,000円)以上の募

金者には記念として第四紀研究全巻をPDFファイルで納めたCD(非売品)を贈呈する。このCD作成は春恒社に依頼し、現在PDF化作業を実施中である。

9. 博物館連携:豊橋市立博物館、兵庫県立人と自然の博物館、産総研地質標本館は第四紀学会との連携事業に協力してくれることになった。豊橋市立博物館では7月からの新規展示の中で日本第四紀学会のコーナーを提供してもらえるので、会長挨拶、第四紀学会の説明、第四紀学関連の写真、学会関係出版物等を展示する。

10. 50周年第四紀電子出版編集委員会(CD出版):執筆分担者を決め原稿を依頼し、完成原稿が集まりつつある。しかし、執筆が遅れている原稿があることや、引用許可取得の手続きが決まっていないうことなどがあり、8月大会までの出版はかなり難しくなりつつある。

11. 2004年に実施した第四紀研連主催のシンポジウム「地球史の現代と近未来 - 自然と人類の共存のために」を、日本第四紀学会50周年記念出版物として東京大学出版会より刊行するが、現在編集集中である。

以上

2005年度臨時評議員会議事録

日時:2006年5月15日(月)12:30～13:30
会場:幕張メッセ国際会議場301A室にて

出席者:熊井久雄(前会長)、町田 洋(会長)、池原 研、井内美郎、上杉 陽、大場忠道、公文富士夫、齋藤文紀、杉山雄一、鈴木毅彦、高橋啓一、兵頭政幸、松浦秀治、水野清秀、坂上寛一(名誉会員選考委員長)、久保純子(記録)

遠藤行事幹事による開会あいさつ、町田会長あいさつに続き、井内美郎評議員を議長に選出し、定数確認の後議事に入った。

報告事項

1. 日本第四紀学会2006年大会(創立50周年記念大会)の準備状況

齋藤幹事長より、大会日程・シンポジウムのプログラム(「第四紀通信」13巻3号掲載)について説明があった。

2. 50周年記念事業実行委員会報告

久保庶務幹事が委員会報告(本誌委員会報告掲載)について代読した。

3. 名誉会員選考委員会報告

坂上委員長より、選考結果(本誌委員会報告掲載)について報告があった。

4. 知的財産権等検討委員会報告

委員として上杉 陽、坂上寛一、真野勝友(以上、旧学会倫理憲章策定委員)、遠藤邦彦、池原 研(以上幹事会)を委嘱し、第1回委員会(4月11日開催)には齋藤幹事長が出席した。委員の互選により上杉会員が委員長に就任した。上杉委員長より資料(略)にもとづき委員会の活動状況の中間報告があった。

5. その他

斎藤幹事長より、第四紀学会ホームページの改訂準備について報告があった。

・ 審議事項

1. 名誉会員推薦の件

報告事項3.で推薦された10名の会員の名誉会員推薦が拍手承認された(8月の総会で議決の予定)。

2. 50周年記念式典における表彰の件(幹事会提案)

8月5日の学会創立50周年記念式典において、功労者ならびに永年会員の表彰をおこなう予定であり、幹事会から以下の各位が表彰対象者として推薦され、拍手承認された。対象者には賞状および記念品を贈呈する予定である。

1) 学会功労者(敬称略)

(財)東京大学出版会
印刷所 創文印刷工業
事務局 中川庸幸(春恒社)
編集書記 綿引裕子
英文校閲者 スーザン シュミット

2) 創立時会員(敬称略)

1956年の日本第四紀学会設立以来50年にわたる会員歴を持つ以下の24名の会員。

阿久津純、市原 実、太田陽子、小野寺信吾、加賀美英雄、鎌田泰彦、北川芳男、吉良竜夫、斎藤実、阪口 豊、四方哲雄、杉村 新、鈴木隆介、瀬川秀良、田中真吾、中川久夫、成瀬 洋、藤井昭二、藤井 守、藤江 力、藤田和夫、堀江正治、村上一幸、吉川虎雄(現名誉会員)

3. 日本第四紀学会の「学会賞」に関する検討結果(中間報告:幹事会)

斎藤幹事長より、前回の評議員会での決定に従い、学会賞のあり方に関して幹事会で検討を行った結果の報告があった。関連する14学会の各賞を参考にして討議した結果、大きく「第四紀研究」に関連した論文賞と、第四紀学に関連した学術や学会貢献に関する賞の2種類の賞(論文賞と学会賞とここでは仮称する)を設けることが望ましいという結論に至った。これらの賞の選考は、論文賞と学会賞それぞれに選考委員会を設けて候補を選考する、受賞者の数は、すべての賞を合わせて毎年5-10件程度とすることなどが提案された。

1) 論文賞(案;名称はすべて仮称)

「第四紀研究」に掲載された論文を対象とする論文賞は、「第四紀研究論文賞」「第四紀研究奨励賞」「第四紀研究短報賞」の3種の賞から構成される。

「第四紀研究論文賞」は、論文著者全員(含非会員)に授与する。毎年1-2件程度とする。対象は、掲載されたすべての論文(短報を含む)

「第四紀研究奨励賞」は、会員である筆頭著者に授与し、年齢は選考年の4月1日で35歳以下とする。毎年1-2件程度とする。

「第四紀研究短報賞」は、論文著者全員(含非会員)に授与する。毎年0-1件程度とする。対象は、掲載された短報とする。

これらの賞の選考は、前年と前前年に掲載された論文を対象とし、自薦・他薦と、選考委員会委員か

ら推薦された論文から選考する。

同一の論文が、複数の賞の対象となった場合には、「第四紀研究論文賞」「第四紀研究短報賞」「第四紀研究奨励賞」の順に優先し、複数の受賞は行わない。「第四紀研究奨励賞」は、会員は1回のみ受賞することができる。

2) 学会賞(案;名称はすべて仮称)

第四紀学の発展に貢献する顕著な業績や活動、また学会活動に貢献した個人や団体・組織に、「日本第四紀学会賞」「日本第四紀学会学術賞」「日本第四紀学会功労賞」の3つの賞を設ける。

「日本第四紀学会賞」は、学会における最高の賞で、優れた業績をあげ、また学会活動にも貢献した会員に授与する。毎年1-2件程度とする。

「日本第四紀学会学術賞」は、第四紀学に貢献した優れた学術業績をあげた個人や団体に授与する(含非会員)。毎年0-2件程度とする。

「日本第四紀学会功労賞」は、第四紀学あるいは学会発展に貢献した個人、団体、組織などに授与する(含非会員)。毎年0-2件程度とする。

これらの賞は、自薦と他薦された中からのみ選考し、選考委員会の委員による推薦は行わない。

3) 今後の予定

8月の評議員会と総会までに「論文賞」に関する規定などを整え、評議員会と総会で改定を行い、2007年大会から新たな論文賞の受賞者が出せるようにする。

「学会賞」については、更に内容に関して検討し、2007年夏の評議員会と大会までに規定等を整え、2008年大会から新たな学会賞の受賞者が出せるようにする。

以上の幹事会案に対し、財政上の可能性や「短報賞」などについての議論がおこなわれ、1)の論文賞については「第四紀研究論文賞(短報を含む、ただし選考基準にそのことを明記)」と「第四紀研究奨励賞」とすることし、2)については幹事会原案が承認された。

・ その他

なし。

以上で議事を終了し、議長解任の上閉会した。

2005年度第8回幹事会議事録

日時:2006年5月7日(日)13:00~17:30

場所:早稲田大学教育学部6階社会科資料室

出席者:町田 洋(会長)、真野勝友(副会長)、斎藤文紀、鈴木毅彦、池原 研、岡崎浩子、兵頭政幸、遠藤邦彦、奥村晃史、水野清秀、久保純子

(議事)

1. 庶務

(1) 前回(4月6日)議事録確認

(2) 50周年事業実行委員会報告

募金者名簿を「第四紀通信」に掲載する。

(3)50周年記念表彰対象者の確認

以下の方の表彰について、次回の臨時評議員会で承認を受けることとした。

1956年創立時以来の会員(24名、敬称略):阿久津純、市原 実、太田陽子、小野寺信吾、加賀美英雄、鎌田泰彦、北川芳男、吉良竜夫、斎藤 実、阪口 豊、四方哲雄、杉村 新、鈴木隆介、瀬川秀良、田中真吾、中川久夫、成瀬 洋、藤井昭二、藤井 守、藤江 力、藤田和夫、堀江正治、村上一幸、吉川虎雄

学会功労者(5名、敬称略):事務局 中川庸幸(春恒社)印刷所 創文印刷工業、編集書記 綿引裕子、英文校閲 スーザン シュミット、東京大学出版会

(4)名誉会員選考委員会報告

選考委員会より以下の9名(敬称略)の推薦があり、臨時評議員会で承認を受けることとした。

市原 実、糸魚川淳二、太田陽子、加藤芳朗、阪口 豊、杉村 新、鎮西清高、中川久夫、羽鳥謙三

(5)知的財産権等に関する検討委員会中間報告

(6)論文賞選考委員会報告

2. 渉外

地球惑星科学連合の会議出席者の確認をおこなった。

学術会議のINQUA 対応特任連携会員推薦依頼の件

3. 広報

創立50周年にあわせ、学会ホームページのデザイン、内容を一新することとした。

「第四紀通信」6月号記事の確認をおこなった。

「第四紀通信」次号は50周年記念大会前に配付のため7月中旬に発行する。

4. 編集

J-STAGEの電子ジャーナルについて前向きに検討することとした。

5. 会計

2005年度中間報告

ホームページ改訂に関する経費の支出について

6. 博物館展示の件

豊橋市自然史博物館:市制100周年記念特別企画展「恐竜と生命大進化 - 中国雲南5億年の旅 - 」,7月14日(金)~10月9日(月:祝日)

兵庫県立人と自然の博物館:ミニ企画展「自然史から見た兵庫の海と森(仮題)」,9月9日(土)~11月5日(日)

産総研地質標本館:特別展「人類史と社会の未来をつなぐ地質時代 - 日本の第四紀研究50年 - 」(仮題),10月3日(火)~11月12日(日)

豊橋市自然史博物館展示パネルについて検討した。

7. 学会賞規定改定案の件

8月の総会までにすべての規約改定は間に合わ

ないので、論文賞について臨時評議員会に提案し、その他は次年度に検討することとした。

8. 臨時評議員会(5月15日、幕張)準備

議長候補者

50周年記念大会プログラム案

臨時評議員会資料の作成

訂 正 文

第四紀通信13巻3号に掲載しました、50周年記念事業募金者名簿に誤りがありました。関係者の皆さまに深くお詫びするとともに訂正させていただきます。

誤) 島口 点 正) 島口 天

2007年度 女性科学者に明るい未来をの会「猿橋賞」候補者募集

女性科学者に明るい未来をの会より、「猿橋賞」候補者の推薦を依頼します。下記の要領で応募して下さい。募集内容、応募用紙などは各学会事務局に送付してありますが、電子メールでお申出頂ければ、様式を添付ファイルでお送りします。また、<http://www.saruhashi.net/>からもダウンロードできます。

- 1) 対象 : 推薦締切日に50才未満で、自然科学の分野で、顕著な研究業績を収めた女性科学者
- 2) 表彰内容 : 賞状、副賞として賞金30万円、毎年1件(1名)
- 3) 締切日 : 2006年11月30日
- 4) 応募方法 : 所定の用紙に受賞候補者の推薦対象となる研究題目、推薦理由(800字程度)、略歴、推薦者(個人または団体)及び主な業績リストを記入して、主な論文別刷10編程度(2部ずつ、コピーも可)を添え、5)の送付先までお送り下さい。
- 5) 推薦書類送付先 :
〒168-0071 杉並区高井戸西3-6-26
古在由秀方
女性科学者に明るい未来をの会
(封筒には、「猿橋賞推薦書類」と明記して下さい。書類は、猿橋賞選考のために選考委員会などで用いられます。書類は返却いたしませんのでご了承下さい)
- 6) 問合せ先 : saruhashi2006@saruhashi.net

第10回尾瀬賞募集のお知らせ

(財)尾瀬保護財団より、第10回尾瀬賞(湿原に関する研究の顕彰)募集のお知らせがきております。

詳しくはホームページ <http://www.oze-fnd.or.jp> をご覧ください。

第四紀通信に情報をお寄せ下さい

第四紀通信の原稿は随時受け付けております。
広報幹事: 兵頭政幸(mhyodo@kobe-u.ac.jp)宛にメールでお送り下さい。
第四紀通信は奇数月月上旬原稿締め切り、偶数月1日刊行予定としていますが、情報の速報性ということから、版下が完成した段階でホームページに掲載するよう努力しています。奇数月15日頃にはホームページにアップするようにしていますのでご利用下さい。

日本第四紀学会広報委員会 神戸大学内海域環境教育研究センター 兵頭政幸
〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 電話 078-803-5734 Fax 078-803-5757
広報委員: 松下まり子・後藤秀昭 編集書記: 岩本容子

第四紀学会ホームページ <http://www.soc.nii.ac.jp/qr> から第四紀通信バックナンバーのPDFファイルを閲覧できます。